

近代中国人日本留學生の「反日」と「親日」について

呂 順 長

本稿は近代中国人日本留學生の「反日」と「親日」の原因を中心に考察したものである。まず「反日」の原因について、近代において日中間で不幸な戦争や事件が続き、それにより両国民の相手国に対する感情が悪化していたこと、留學生が日本で蔑視と差別を受けたこと、中国に進出した一部の日本人居留民が乱行と悪事を働いたこと、一部の留學生が私利私欲に駆られ「反日」に走ったことなどを挙げ、事例を通じて分析した。次に、「親日」を「文化的親日」と「政治的親日」とに区分し、それぞれの定義を試みた。それから「政治的親日」の原因については、権力・名誉・利益を追求するという共通のもの以外に、日本政府の中国人留學生教育政策が一定の功を奏したこと、留學生がほかの人と比べて「政治的親日者」になるのに一定の優位な立場にあったこと、留學生の構成が複雑で全体から見れば名利心の強い傾向があったこと、一部の留學生は長く日本で暮らし日本に対して好感を持ち日本人の思想と観点に共鳴しやすかったことなどを挙げ、分析を加えた。最後に北京市档案馆で見つけた『王克敏等人簡歴』という史料に基づき、傀儡中華民国臨時政府の日本留學経験者69人の氏名・原籍・出身校・職務・派閥関係などを整理し、同政府の官吏のなかで日本留學生が約三分の一を占め、そのなかに浙江省、河北省、江蘇省、広東省、福建省の出身者の人数がそれぞれ1-5位を占めるなどの事実を明らかにした。

キーワード：中国人日本留學生、反日、文化的親日、政治的親日、漢奸

はじめに

19世紀末から20世の前半までに日本や米国など海外に留學した中国人學生の総人数は数十万人規模に上っている。彼らの留學先の国に対する感情について、「留米親米、留日反日」（米国に留學した者は米国に親しみ、日本に留學した者は反日となる）という言い方がある¹⁾。誇張的で科学的ではない表現ではあるが、日本留學経験者のうち反日の立場を取っていた人がかなりあったことを物語っている。いっぽう、同じ留學生のなかで、文化的に日本に親しむ者と、政治的に日本に親しみ日本軍の中国侵略に協力した所謂「漢奸」とが数多くあったのも周知の事実である。では、仮に近代中国人日本留學生を単純に「反日」、「親日」、「反日でも親日でもない」、「時に反日であり時に親日である」という四つのパターンに分けるとすれば、それぞれどれぐらいの割合を占めるか。「反日」と「親日」の原因はそれぞれどこにあるのか、なぜ人によって、また場合によっては同じ人でも言行が違ったのか。これらの問題に答えるためには帰国後の學生の行動軌跡に対して詳細な調査を行う必要がある。しかし、それは膨大かつ困難な作業で、実際にはほぼ不可能である。故に、本稿ではできるだけ多くの事例を通じてその一部の問題に対して考察を試みることにする。

一、「反日」の原因

近代中国人日本留学生のなかで反日派または排日派が一体どれぐらいの割合を占めるか、これは非常に興味のある問題であるが、現段階でまだ確かなデータはない。というより、そもそもそういう統計数字を出すことがなかなか難しい。しかし、反日の立場を取っていた者が少なからず存在したことは争えない事実である。では、彼らが反日となった原因は一体どこにあるのであろうか。

まず、全体的に見て、派遣国と受け入れ国の社会状況、両国の文化の異同、受け入れ国の留学生関連政策、受け入れ学校の対応、留学から帰国した後の生活環境と社会状況、各個人の立場と素養など、これらはすべて留学生の留学受入国に対する感情に影響するといえよう。

近代中国人日本留学生の場合、まず単に当時の社会状況から見れば、彼らの置かれたのは日清戦争、義和団事変、日露戦争、日本の中国に対する二十一カ条要求、満州事変、日中全面戦争など、日中間で戦争や不幸な事件が続いた時代であった。それゆえに、日中両国の多くの国民は相手国に対してあまりよい感情を持てなかった。そういう流れの中で、中国人日本留学生の中からも日本に対して悪感情を持ち、反日となる人が多く出た。これはいわゆる「留日反日」の最大の原因ではないかと思われる。

つぎに、学界では一般的に、多くの留学生は日本留学中に差別などを受けたことにより反日的となったとされている。留学生たちが日本で受けた差別などについては、留学生の日記やその後の回想録にも多く記録されている。例えば、1900～1904年に東京専門学校と法政大学で学んだ曹汝霖²⁾は回想録『一生之回憶』（一生の回想）の中で、「日本は西洋を崇拜している。留学生は路上を歩くと、よく無知な児童に指差して嘲笑されたりする。」³⁾と書いている。1913年に日本留学した郁達夫⁴⁾は1936年に留学時代の日本人の中国人に対する態度を振り返って、中流以上の日本の国民は中国人留学生に対して「真綿で針を包む」ような態度で、籠絡したりするが、大多数を占める中流以下の日本国民はまったく遠慮もせず、態度や言葉、また行動などで、「劣等民族の、亡国となる賤しい国民が、お前らを支配する大日本帝国に一体何をしに来ているのか」と言わんばかりであると述べている⁵⁾。当時の日本人は「支那」という言葉を使う時、往々にして軽蔑と差別の語気を含んだので、留学生達はそれを耳にしたとき、いつも侮辱を感じたという。これに対して、郁達夫はかつて次のように証言している。日本では、「無邪気な、絶対に男子に従う美貌の少女でさえ、父兄の影響を受けて、支那という言葉聞くだけで、彼女たちの常態を維持することができず、また人に対して好感を持つこともできなくなる。支那または支那人ということばを日本人とりわけ妙齡の少女の口から発せられるのを聞いた時、頭の中でどれだけ侮辱、絶望、悲哀、憤慨、心痛を感じたか、これは日本に来た経験のない同胞なら絶対想像できないのである。」⁶⁾ このように、一部の日本人は中国人留学生に対して蔑視と差別を与えた。そういう行為がある程度留学生が帰国後に反日となることにつながったことは十分想像できる。

日本で差別を受けたことが留学生の反日につながるについて、周作人は自身の留学経験を以てそれを否定している。1934年、周作人は日本訪問中、ある集会で多数の実業家や軍人に会い、「留日学生の多くが帰国すると次々に排日になってしまうのはなぜか？日本で辱めを

受けた結果ではないか」というある中将の質問に対して、「そうとは限らない。自分の経験から言っても、どんな辱しめも受けたことはないし、思うに、留学生が日本国内の日本人を見た目で中国にいる日本居留民の行為を見るせいではないか。普通の中国人は彼らを見て日本人はもともとこうなんだと思うほかないから、かえって泣き寝入りに終わるとしても、留学生のほうは、日本国内ではそうでもない人々が中国にやってくると特別タチが悪くなることを知っているわけで、彼らが反感を抱くのはまったく当たり前というものである。」⁷⁾と答えている。また彼は、その例として、戦区内で日鮮浪人による華人蹂躪が黙認されていること、日本人経営の店が大いに麻薬販売にかかわっていることなどを挙げている。周作人自身が日本留学中にそれほど差別を受けなかったことはこれでわかるが、とはいえ、これだけで留学生全体がそうであるという証明にはならないであろう。ただ、周作人はここで留学生が反日となるもう一つの理由を伝えている。それは一部の日本人が中国に出ると、特にタチが悪くなり、乱行と悪事を働くので、留学生の反感を買ったということである。

また、留学生の中で、内心では日本に対してそれほど反感を持たないが、周囲の「反日」的環境に気を配り、または利益に駆られ、反日の言動を取った人もあったろう。地質学者として、また作家としてよく知られていた張資平はその典型的な例である。1912年、張資平は民国時代の最初の官費留学生として日本に派遣され、日本語学校を経て、1914年に東京第一高等学校（帝国大学予科）、1919年に東京帝国大学理学部地質学科にそれぞれ入学し、1922年に東京大学理学学士の学位を取得して帰国した。帰国後、大学で教鞭を執りながら、精力的に小説を創作し大量の作品を発表している。そのなかで、1930年7月に発表された長編小説『天孫之女』（天孫の女）は、日本軍人の娘である花子が遺棄されたあと、誘拐され遊女になったというストーリーを通して、日本人が自分たちは天孫族であると自称することを否定しようとしている。この小説は格調が低俗で、日本人に対して無責任で極端な描写が多いが、出版されてすぐ大きな反響を呼び、二年の内に版を5回重ね、発行量は11000冊にも上った。また日本語にも翻訳され、『上海日報』（日本語）で連載された。1931年4月10日に刊行された『現代文学評論』の「現代中国文壇逸話」の欄に「張資平 北四川路の通行を恐れる」という一文が載せられ、「張資平は『天孫之女』を書き、それが日本人により翻訳され日本語の上海日報に連載され、日本人から大きな反感を買っている。現在、張先生は北四川路を通るのを恐れている」と紹介されている。『天孫之女』の創作の背景には中国人の反日感情があるが、作者の「眼中ただ利益あるのみ」という心理がこの小説の誕生に関係していることも否定できない。張資平はこの小説により、日本租界地の北四川路の通行を恐れるという結果を招いたが、小説の好調な売れ行きにより多大な利益を獲得している。この小説に限らず、張資平の作品は総じて一時的によく売れたが、格調が低く、粗製乱造の傾向がある。現在でも、張資平はよく「小説商人」、「眼中ただ利益あるのみ」と酷評されるが、その小説の創作の経緯と内容を見れば、そういう評価を受けるのも仕方ないと思われる。まさにある研究者が指摘しているように、「若し純粋な敵愾心によるものならば、張資平は『天孫之女』のような格調が低く見るに堪えない作品ではなく、他の種類の小説を創作することもできただろう。張資平がその後日本軍に協力し、所謂『漢奸文人』となったのも文化的親日によるものではなく、利己心と利欲によるものである。」⁸⁾つまり、張資平の低俗

な抗日小説の創作も後の日本軍への協力も周囲の環境に左右され、個人の利益を追求するという部分が大きかったといえよう。

上述したように、一部の留学生が帰国後反日となったのにはいろいろな理由がある。日本留学中に受けた蔑視と差別はあくまでその理由の一つであり、必ずしも日本に留学したから反日となるというわけではない。事実、留学生の中で所謂「親日派」も少なからず存在していたのである。

二、「文化的親日」と「政治的親日」

本稿では、「親日」を「文化的親日」と「政治的親日」とに分けて考えることにする。所謂「親日派」のなかで、文化的または政治的のいずれかで親日となる人もあれば、文化的にも政治的にも同時に親日となる人もある。では、具体的に「文化的親日」と「政治的親日」とはどう違うのか。

ここで試みに、日本文化（歴史文化、風土景物、生活習俗、人情儀礼など）を理解し、さらにそれに対して愛慕の情が生じ、言行にも表れることを「文化的親日」と定義する。日本文化を理解するだけで愛慕の情がなければ、「知日」としか言えず、日本文化に無知であるが、それをただ愛慕するというのは「媚日」（日本に媚びる）である。真に日本文化を理解し、愛慕し、さらに言動にも影響することこそ「文化的親日」といえよう。このような人物は多くいるが、ここでもう一度郁達夫と周作人の事例を以て説明する。

1913年、17歳の時に兄に従って来日した郁達夫は、1922年に東京大学経済学部を卒業して帰国するまで10年間も日本で生活している。前述のとおり、彼は留学生が日本で差別を受けることに対して深い憤慨を感じていたが、しかし同時に日本文化を深く理解しそれに対して深い愛慕の情も持っていた。1935年7月、郁達夫は「海上」という一文のなかで20数年前に長崎、瀬戸内海などを通った時の感想を次のように綴っている。「美しい海、小さい島々が点在し山が青く水が清い日本の西部の都市長崎、絵のようにきれいな瀬戸内海、これらは私の日本民族と日本文化に対する敬慕の情を募らせた。日本芸術の清淡にして多趣であること、日本民族の辛抱強く勤勉であることは、これらの風景と周囲の果樹園や開墾地からもだいたい分かる。伝説中の蓬莱島はこれらの島々を指しているのかどうか分からないが、中国から東へと渡り、瀬戸内海の優れた山水の景色と島の漁村と農村を見ると、たとえ秦の徐福でなくとも、仙境の幻想をせずにはいられない。」⁹⁾ 来日の当初、郁達夫は日本の飲食と住居に対して不便ないし苦痛を感じたが、留学生生活を終えてそれを思い起こした時、「この島の粗茶淡飯すべてが恋しくなる。刻苦な生活、綺麗な山水、健全な精神、整然とした秩序など、いま思い起こせば、日本で過ごしたのは蓬莱仙境のような生活だった」¹⁰⁾と述懐している。また日本の文学、舞楽、茶道、花道、和服、日本人の衛生習慣などに対して、彼はことごとくに絶賛し、ひいて「日本人の野外活動を好むところも、わが中国人の及ばないところである」とまで述べている¹¹⁾。日本文化に対する親愛の情はその文字の間に余すところなく表れている。

郁達夫と同じく周作人も兄に従って来日し、1906年から1911年に留学生生活を終えて帰国するまで日本で5年余り過ごしている。来日当初の日本に対する印象について、彼は『知堂回想録』

の中で、「この最初の印象は極普通なものだが、しかし、一方とても深いものであった。というのは、私がその後五十年来、何の変更も或いは修正もなかったのである。一言でいうと、生活の面において、彼らの天然を好み、簡素を尊ぶ性情である。」と追憶している。このように深い印象が残ったのは下宿先の主人の妹乾栄子という少女とも深い関係があるようである。「私が（東京に着き下宿先の）伏見館で初めて出会った人は館主人の妹で同時に下女を兼ねた乾栄子という、十五六歳ほどの少女であった。荷物を運んだりお茶を持ってきたりしてくれた。（中略）最も特別に思えたのは、彼女が素足で室内を行ったり来たりしていたことである。」¹²⁾ 周作人はその後この少女と特に接触したようなことはなかったらしいが、しかし彼女はこのときの強い印象で周作人の永遠の記憶となる。1933年から1940年までの間、50歳にもなる周作人であるが、何回も少女の夢を見たという¹³⁾。75歳前後に書いた『知堂回想録』のなかでも、少女に対する描写は依然として明晰で感情を帯びている。この少女が周作人の日本認識の形成に、多かれ少なかれ影響を与えたと十分いえよう。その後、周作人は「日本的人情美」（「日本的人情美」、1925年、『語糸』）、「日本管窺」（1-4、1935-1937年、『国聞週報』）、「談日本文化書」（「日本文化を語る手紙」、1-2、1936年、『自由評論』）、「懷東京」（「東京を懷かしむ」、1936年、『宇宙風』）など日本に関して数多くの作品を発表し、日本文化に対する理解と愛慕は同時代で彼の右に出る人がいないと思われるほどである。また周作人は東京を「第二の故郷」とし、「正直に言うと、日本は私の愛している国の一つである。（中略）その通俗小説と俗謡、浮世絵、磁・銅・漆器、四畳半の部屋、小袖と下駄、また飲食でも必ずしも世界一とされている中華料理をひいきするのではなく、かえって日本の刺身と味噌汁が好きである。私は日本のどこにも住むことができ、その快適さは決して中国に劣らない。」¹⁴⁾と述懐している。このように、周作人は文化的には十分に親日であるといえる。しかし、その一方で、周作人は日本の中国侵略と、一部の居留民の悪行が大いに中国人としての自尊心を傷つけたとし、それに対していろいろな形で批判をしている。「日本人がすぐれて美を愛することは、文学芸術からも衣食住の形質からも等しく見てとれるところだ。然るに中国に対する行動においては、なぜあれほどの醜悪さを示すことができるのか。日本人が器用なことも、工芸や美術によって証明できる。ところが、行動においてはかくも拙劣である。日本人は清潔好きでその至るところの浴場は他国に例を見ない。けれども行動においてはこれまたかくも汚く、時には余りの卑劣さに吐き気さえ催させる。これは実に天下の一大奇事であって、ほとんど奇跡といってもよいだろう。」¹⁵⁾ 実に痛烈な批判である。このように、彼が日本に対して取っていたのはまさに「愛すべきは愛し、恨むべきは恨み、親日にも似て排日にも似ている」¹⁶⁾ という一見はっきりしないような態度であるが、実は極めて分明的な方式であった。繰り返しになるが、すなわち、文化的には親日であるが、政治的には反日である。また中国を裏切り日本側に協力した「政治的親日者」に対しても、周作人は「中国で毛嫌いされ、日本でチャホヤされる親日派などは、真の親日派ではなく、名誉と利益にたかる小人にすぎず、中国にも日本にも等しく有害で、中国の実利と日本の栄光とを同時に損なう連中である」¹⁷⁾と切り捨てている。ただ、このような立場を取っていた周作人もその後（1939年以降）、日本軍に協力し、「政治的親日」の道を歩んでしまう。これは実に皮肉なことで残念であるが、また別の問題として論じる必要がある。

ここで「政治的親日」ということばが出たが、では具体的にどんな行為を指すのか。本稿では試みに、日中両国間に政治、軍事、経済、外交などの面に於いて利益の衝突が生じた時、中国人が国家と人民を裏切り、日本あるいは日本側の関係者に協力を提供し、国家と人民の尊厳を傷つけ、国家の利益と人民の生命財産に損害をもたらすことを、「政治的親日」と定義する。またそういう行為があった者を「政治的親日者」とする。ここでいう「政治的親日者」は『辞海』の「もとは漢族のカスを指すが、現在は中華民族の裏切り者を指す」と定義されている「漢奸」と共通点があれば相違点もある。ただ、近現代に入ってから日中間に数回にわたって不幸な戦争や事件があった時期に限って考えれば、本稿でいう「政治的親日者」は日本側にいろいろ協力し中国に不利益をもたらした人を意味する「漢奸」とほぼ同じ意味であると理解してよい。資料引用の際などの混乱を避けるために、以下「漢奸」という言葉を使うことにする。

1945年11月13日、中国国民党政府は『処理漢奸案件条例』を公表し、罪が重く法律の制裁を受けなければならない「漢奸」の範囲を決めている。それによると、日本の傀儡組織で「簡任¹⁸⁾以上の公務員、あるいは薦任クラスの組織長を務めた者」、「スパイ工作者」、「敵の勢力を借りて他人に危害を加え、告発された者」、「敵の軍事、政治、スパイなどの組織で働いた者」、「傀儡組織の金融あるいは実業の組織の首長と重要ポストを務めた者」、「傀儡組織が管轄する新聞社、通信社、雑誌社、書局、出版社の社長・編集・経理に任じ、敵の為に宣伝工作を行った者」、「映画制作所、放送局、文化団体の責任者を務め、敵と傀儡組織の為に宣伝工作を行った者」、「傀儡の党部、新民会、協和会、傀儡の参議会および類似の組織で重要な仕事に携わった者」などの十種類の人が罪の重い「漢奸」として法律の制裁を受けなければならないとされている¹⁹⁾。

「満州事変」から日中戦争終結までの時期に、大小さまざまな「漢奸」が少なくとも数十万人いたと推定されている。1948年の『中華年鑑』によると、1944年11月から1947年10月までの間に、各省・市の検察院と裁判所で処理された罪の重い「漢奸」の人数はつぎの通りである。検察側は45679件の案件を処理し、30185人に対して起訴している。裁判所は25155件の案件を受理し、14932人に対して刑を言い渡している。その内訳は、死刑369人、無期懲役979人、有期懲役13570人、罰金14人となっている²⁰⁾。「漢奸」の数は決して少ないとは言えない。

三、「政治的親日」の原因

では、このような多数の「政治的親日者」または「漢奸」と呼ばれる者のなかで、日本留学生がどれぐらいの割合を占めているだろうか。詳細な統計は不可能であるが、次のいくつかのデータからその大体の割合が窺える。

ある調査によると、傀儡満州政権の中で溥儀を含む49名の高官のうち日本留学経験者は22人あり、全体の45%を占めている。1937年に北京で立てられた傀儡中華民国臨時政府の高官23名のうち、日本留学経験者は12名あり、全体の52%を占めている。1938年3月に南京で立てられた傀儡中華民国維新政府の高官15名のうち、日本留学経験者は6名あり、全体の40%を占めている。1940年3月に南京で立てられた傀儡中華民国国民政府の高官51名のうち、日本留学経験者は14名あり、全体の27%を占めている。そのほか、傀儡冀東防共自治政府の高官2人（委員

長殷汝耕、秘書長池宗墨）はともに日本留学経験者であり、傀儡蒙疆聯合自治政府の高官4人の中には日本留学経験者がいなかった。以上の統計に入った傀儡政府の高官144人のうち、日本留学経験者は合計56名²¹⁾あり、全体の39%を占めている。留学生の出身地域から見れば、遼寧省30人、浙江省20人、江蘇省16人、河北省14人となり、4省だけで全体の56%を占めている²²⁾。

南京市檔案館が編纂した『審訊汪偽漢奸筆録』（江蘇古籍出版社、1992年）に陳公博、周佛海、褚民誼、温宗堯、江亢虎、陳璧君、梅思平、林柏生、李聖五、丁默邨、陳春圃、羅君強、王蔭泰、蔡培、袁愈佺、鄧祖禹、伍澄宇、楊惺華、殷汝耕、劉玉書、汪時璟、周作人など主要な「漢奸」22人の審判記録が収録されている。そのなかで周佛海、褚民誼、江亢虎、王蔭泰、蔡培、袁愈佺、伍澄宇、殷汝耕、劉玉書、周作人ら10人は日本留学の経験があり、全体の45%を占めている。

『冀東防共自治政府文武簡任人員姓名略歴表』によれば、傀儡冀東防共自治政府の主要構成員15人のうち、日本留学経験者は、財政庁長の趙從懿（法律科）、教育庁長の劉雲笙（弘文学院師範）、実業庁長の殷体新（慶応大学）、秘書処長の陳曾栻（明治大学政治経済科）、外交処長の王潤貞（第四高等学校と鉄道院）、保安処長の劉宗紀（士官学校）、参事の叶爾衡（早稲田大学政治経済科）、禁煙総局局長の劉友恵（東京帝国大学）、保安第四総隊長の韓則信（明治大学政治経済科）の9人で、全体の60%を占めている²³⁾。

以上のデータで分かるように、傀儡政府と組織の高官のなかで日本留学経験者は相当高い割合を占めている。では、これらの留学生はなぜ国家と人民の利益を裏切り、「漢奸」となったのであろうか。彼らが「漢奸」になった時の心情はどのようなものであったろうか。

日本留学の経験の有無を問わず、大小さまざまな「漢奸」について、「漢奸」になった理由を見れば、一は政治の企図と個人の野心を実現させるため、二は権力・名誉・利益を追求するため、三は基本的な生活を維持するため、四は家族の生命と財産を守るため、の四種類に大きく分類することができよう。「漢奸」たちは各自の身分と地位により、その求めるものは違うが、権勢と利益を求めない者はほとんどいなかったろう。1912年に早稲田大学政治経済科を卒業し、南京国民政府民政部民政司の司長を務めていた蔡培は1937年11月に南京国民政府がやむを得ず重慶に遷都した時、新任の部長と不仲だったため、司長のポストを失い、上海に戻って時局を観望し、その後南京傀儡政府の重要なメンバーとなり、新たに権勢を取り戻したという²⁴⁾。また「南京傀儡政府が成立後、中央の高官から県長、区長、鎮長などの地方の役人まで、すべてが金銭を絞り取るのを目的とし、官位を売ったり、公然と賄賂を行ったりする。組織の中では、ほとんどお金の要らない事がなく、お金のいらぬ人もいない。ただ区長を数か月務めただけで千万の富を積んだ者もあるから、ほかはこれで十分推し測れるだろう。」²⁵⁾という証言もある。これは権力を握る傀儡政府の官吏の場合であるが、一部のごく普通の庶民も生活が苦しく生計を維持するため小利を求めて「漢奸」の道を歩んでしまうという場合もあった。哀れな人の悲しむべき選択である。

傀儡満州政権で任官していた「漢奸」はどのようなメンバーで構成されていたであろうか。1932年頃に二回にわたって東北で実地調査を行った兪大純²⁶⁾は彼らを次の五種類に分類し、それぞれの特徴を分析している。

- 一、もとの清朝皇帝に忠誠心を持つ者。羅振玉、胡嗣鏞、宝熙、陳曾寿など、前清朝政府で仕官していた者がこれに属する。彼らは日本語が分からないため、傀儡政府で職務を担う以外に、ほかの類の活動をせず、日本人に注目されない。
- 二、家族の命と財産を守る者。張景惠、袁金鎧、熙洽、臧式毅など、もともと東北で勢力と財産を持っていた者がこれに属する。彼らの多くはもともと張作霖親子の部下で、特に思想や主義はなく、金銭と命を愛しているのみである。
- 三、虚栄に熱中する者。張燕卿、馮涵清など、もともと東北で位の低い官職を持ち、仕官に強い執着心がある者はこれに属する。この輩はただ仕官を旨としている。
- 四、生活を維持するための者。許宝衡、楊華、陳揚生など、もともと東北で働いていた者、または新たにほかの地方から東北に来て傀儡組織に入り、それによって生計を立てる者がこれに属する。彼らはいわゆる大志がなく、ただ生活を維持するためだけで、その官職は簡任以上の者がいない。
- 五、もともと漢奸であった者。鄭孝胥、趙欣伯、丁鑑修、謝介石、闕鐸、鄭垂など、かつて日本人に養われて日本人と共に仕事をし、あるいは日本側のスパイをしていた者がこれに属する。彼らの多くは中国の教育を受けたことがなく、幼少から日本の教育を受けていたので、祖国に対する裏切りの行為を当然の職責のように思っているようである²⁷⁾。

以上は日本留学の経験の有無と関係なしに行われた分類と分析であるが、留学経験のある者が「漢奸」のなかでかなり高い割合を占めているのは、以上の共通の原因のほかに、次のようなことも考えられる。

まずは日本政府の中国人留学生教育政策が一定の功を奏したと考えられる。近代における中国人の日本留学は近代日中文化交流の最も重要な内容である。その過程において、多くの日本人は中国に対する好意、古来中国から受けた文化の恩恵に報いようという気持ちを以て、中国人留学生に接し教育したのである。しかし、日本政府が中国人留学生の教育に力を尽くす裏には尋常でない目的もあった。日清戦争後、日本政府及び関係者は中国人留学生の教育問題と中国の教育問題に強い関心を持ち、それを通じて親日者を育て、政治及び経済などにおいて日本の利益を拡張しようとしたのである。これを裏付ける資料は枚挙に暇がない。例えば、1998年に中国駐在公使の矢野文雄が外務大臣西徳二郎にあてた機密報告の中で、「我国の感化を受けた新入材を老帝国に散布するは、後我勢力を東亜大陸に樹植するの長計なるべしとの次第を茲に敷衍せば、其武事に従ふ者は日本の兵制を模倣するのみならず、軍用機器等をも我に仰ぐに至るべく、士官其他の人物を聘用するにも日本に求むるべく、清国軍事の多分は日本化せらるること、疑を容れず。又理科学生は其の器械・職工等をも之を日本に求むるなるべく、清国の商工業をして自づから日本と密接の関係を有せしめ、随って我商工業を清国に拡張するの階梯とも為るべし。また法律・文学に関する学生などは、専ら日本の制度に則り清国将来の進運を謀るべし。事若し此に至らば、我勢力の大陸に及ぼすこと、量る可らざるものあらん。而して清国官民が我国に信頼するの情は亦た今日に十倍すべし。是等の学生が日本に対する縁故より、将来に於いて清国自から進んで続々学生を我国に送出するに至り、我国の勢力は暗々裏に東亜大陸に増進すべし。」²⁸⁾と述べている。政府関係者だけではなく、当時の日本の世論も「支

それは教育を渴望するので、日本の教育者がこの機会に乗り支那の教育問題に関与し、その実権を握れば、日本は支那に於いて教育問題のリーダー的役割を發揮でき、支那教育の母国となる。種をまいておけば、将来あらゆる権利がここより生じる」²⁹⁾としている。また、直接中国人教育に従事していた人の中でも、「一人の支那青年を多く養成するのは日本の勢力を一步支那大陸に進むる所以の大計」³⁰⁾と鼓吹する者さえあった。いっぽう、中国側からすれば、日本側の尋常でない目的を察知しなかったわけではないが、国を強くするために日本を我が師とし、「東京に留学生を一人多く派遣すれば、将来新しい中国を建設するための技師が一人増えることとなる」³¹⁾と見る人も多く、現実的な狙いを持っていた。このような背景のもとで行われた日本人による中国人留学生の教育事業はすべて日本政府の思惑通りにいったわけではないが、日本留学から帰国した後の一部の留学生の言動をみれば、日本政府の中国人留学生教育政策は一定の功を奏したといえよう。

次に、留学生自身がもし「漢奸」になろうとすれば、ほかの人と比べて一定の優位な立場にあったといえよう。日本留学の経験を持ち、日本語が分かり、日本人とも付き合い、ほかの人より日本のことを理解している人は「漢奸」になるというわけではないが、当の本人にもしその意志があれば、普通の人よりなりやすいのも事実である。日本留学で身に付けた日本語と専門知識、人間関係によって傀儡政府と組織で職を得た中小「漢奸」から、汪精衛、周仏海、褚民誼、殷汝耕などの大物「漢奸」に至る人たちは、もし当初日本留学の経験がなしに中小あるいは大物「漢奸」になれたかといえ、容易であったとは言い難い。

第三は、留学生の構成は複雑であるが、全体から見れば名利心が強い傾向があると見られる。科挙試験制度の影響を受けて、古来中国の知識人は勉学・受験・仕官を三位一体的なものとして捉えていた。名句の「万般は皆下品にして、ただ読書のみ高尚なり」というのも、勉学と受験を通じて仕官の道が開け、最終的に「黄金の家」と「玉のような美女」を獲得できることを意味する。近代中国人日本留学生の場合、中流以上の家庭の出身者が大半を占め、貧困家庭の出身者はごく稀である。彼らは留学する前に皆ある程度伝統的教育を受けており、わりに強い功名心を持ち、多くは勉学を通じて官位を取得し、故郷に錦を飾り、先祖に光栄をもたらすというような伝統的な考え方を持っている。清末に於いて、科挙試験の規模の漸次縮小と廃止により、日本に留学した学生が急増したこともこれを物語っている。かつて二回にわたって日本に留学した胡漢民は当時の留学生の構成について次のように記述している。「当時の留学生の構成は極めて複雑である。ただ利禄のために来た者もあれば、非常の志を抱いて来た者もある。勉学に励みまったく他事に関心を持たない者もあれば、交遊と議論を好み勉強に興味のない者もある。日本の一切を妄信しそれを中国の将来の目標とする者もあれば、日本に不満を覚え欧米の政治制度と文化を称える者もある。(中略)秘密結社の頭領で日本に亡命した者もあれば、官吏と名士の身分を持ちさらなる昇進の近道を求める者もある。」³²⁾ 実にさまざまであるが、仕官するために「洋学歴」を求めて来日した人は少数ではない。彼らが帰国後、仕官の道がうまくいかなかったり、周囲の環境に恵まれなかったりするとき、一部の人は強い功名心に駆られて最終的に「漢奸」の道を歩んでしまうということになるのである。

第四は、一部の留学生は長く日本で生活していたため、日本に対して好感を持ち日本人の思

想と観点に共鳴しやすかったと思われる。留学生の中に排日的な思想を持つ人が少なかったというのは前述の通りであるが、留学を通じて日本の歴史文化、風土景物、生活習俗、人情礼儀等を理解し、さらに一部の日本人の親切と好意をも受け、日本に好感を持つ人も少なくなかった。たとえば、前述の上海出身の曹汝霖は1900年に日本に留学し、三年間も中江篤介（兆民）の家に下宿していた。中江の家族は彼に日本語を教えたり、特別な料理を作ったりして大変親切であったという。彼は学校を卒業して帰国する前、友人と外で酒を飲みすぎ、「中江の家に帰った後も頭が痛く、喉が渴いていた。中江の令嬢の千美子が寢床の用意をしてくれたので、私はそのまま寝た。それから、彼女は頭が痛そうな私を見て、壺を用意し、吐くのに備えた。さらに氷水を飲ませてくれたり、水袋を私の額に当てたりして静かに休むように言ってくれた。彼女は私がうとうと眠るまでずっとそばで付き添ってくれた。外国人に対して、こんなに優しくしてくれたのは、実にありがたいもので、心を打たれたものである。」³³⁾と日本での留学生活の一場面を生き生きと描いている。また本稿で何回も登場した周作人は「日本の衣食住」という随筆の中で、言葉を尽くして日本の飲食・服装・住居を称えている。彼はさらに「私は東南（江南地方）の水郷に育った人間である。あのあたりの暮らしはなかなか厳しいもので、冬は屋内にも火気がなく、冷たい風が寢床の中まで吹き込むことがあったし、食う物といっちは年中葉々だの魚だのといった辛い塩漬ばかりだった。そんな訓練を積んだあげくの東京での下宿生活が具合の悪かろうはずはなかった。」³⁴⁾とも述べている。個人差はあるものの、江南地方の人はほかの地域と比べて比較的早く日本の生活に慣れることができ、さらにそれが好きになる人が多いということを物語っている。曹汝霖も周作人も後に「漢奸」とされる道を歩んでしまったが、これは彼らの日本に対する愛着とまったく無関係とは言えまい。また前にも触れたように、傀儡政府と組織には浙江省と江蘇省など江南地域出身の留学生が多かった。これはまずもともこの地域からの留学生の総人数が多かったことに関係するが、江南地域の自然環境と生活習俗が比較的に日本に近く、留学生たちが日本に対して親しみをもちやすかったことにも関係すると思われる。これは次節に示す史料『王克敏等人簡歴』のデータからも同じ傾向が窺える。

四、『王克敏等人簡歴』に見える華北傀儡政府の日本留学生

1937年12月、日本軍の支持のもとで、かつて北平政務委員会委員長代理を務めた王克敏、冀察政務委員会委員の湯爾和・王揖唐・齊燮元、及び北京政府の要職を務めていた董康、高凌霨、朱深、江朝宗などが集まり、北京で傀儡中華民国臨時政府を樹立した。この政府の高官23人のうち日本留学出身者は52%の12名を占めているというのは前述の通りであるが、普通の役人も含む構成員のなかで留学生がどれぐらいの割合を占めるか、これまで確かなデータはなかった。最近、筆者は北京市档案馆で『教育・治安・内務総署零散档案彙集/王克敏等人簡歴』（档案番号J144-1-21）を発見し、傀儡中華民国臨時政府で任官していた201人³⁵⁾の出身校と略歴を知ることができた。その内容から判断して同史料は1938年から1940年までの間に作られたことが分かる。また、冒頭の王克敏の略歴に関する記述の中に、「瑞廷は当時潘総理の外務秘書を務め、王克敏・梁鴻志などと時々面会する機会があった。」とか、「記者は潘総理の優遇を受け、潘本

人の外務秘書を10年務めたので、現今の中国朝野の政客と海外の名流に対して知るところが多い。他日人物の個性を研究する際の参考にするため、事実に基づきそれを簡略に記した。」といった記述がある。これらから、この史料を書き残したのが北洋政府最後の総理潘復の外務秘書を務めた章瑞廷であること、彼がなぜこの資料を作成したかなどが分かる。この史料を詳しく読むと、個別の人物の原籍が本来のものと違うなど、不備なところもあるが、その主な内容は基本的に信用できそうである。つぎに、この史料に基づき、ここに見える日本留学経験者69人の氏名・原籍・出身校・職務・派閥関係などを一覧にまとめておく。

氏名	原籍	出身校 ³⁶⁾	職務	派閥関係
于長新	金川	日本国立神戸高等商科大学	臨時政府行政委員会秘書	王克敏
陳曾亮	福建閩侯	日本法政大学	王克敏秘書	王克敏
蕭百新	湖南新陽	日本東京師範大学	臨時政府情報処第四科科长	王克敏
張仲直	湖北鄂城	日本神戸高等商業学校	臨時政府事務處處長	王克敏
岳開先	四川成都	日本士官学校	臨時政府外事局局長	王克敏
吳敦礼	福建	日本東京帝大法学部	臨時政府外事局第二科科长	王克敏
于長富	金川	日本京都帝国大学	臨時政府交通局副局长、航空会社理事	王克敏
閔庚沢	浙江余杭	日本早稲田大学	外事局第三課課長	王克敏
王蔚文	浙江	日本東京工業大学機械科	交通局電政科长	王克敏
許修直	浙江	日本法政大学	臨時政府行政委員会調査処長、電電会社副総裁	王克敏
韓振華	北京	日本某大学	北京塩業総行副理、総理の職務を代行	王克敏
李宣威	福建	日本高工学校機械電汽専科		王克敏
楊延溥	四川	日本士官学校	臨時政府外務局長兼建設署副署長	王克敏
邵東湖	浙江	日本高工学校	王克敏の日本側との交際・応接を担当	王克敏
王揖唐	安徽	前清進士、後に日本留学	臨時政府常務委員会委員	
趙子成	浙江	日本某大学	中日経済協議会秘書長	王揖唐
張同礼	浙江	日本明治大学	天津市公署顧問	王揖唐
周二為		日本東京帝国大学法政科	中日経済協議会秘書長、臨時政府情報処処長を兼任	王揖唐
林文龍	福建	日本大学政治科	臨時政府情報局局長	王揖唐
羅韻蓀	広東	日本明治大学商科	事務處處長	王揖唐
陳維廉	山東	日本広島文理大学理科	政委会日文秘書	王揖唐
殷同	浙江	日本陸軍結理学校	臨時政府建設署署長	
劉成志	江蘇武進	日本東京帝国大学政治経済科	天津航政局局長等	殷同
張志遠	浙江平陽	日本早稲田大学政治経済科	建設総署総務局長	殷同

氏名	原籍	出身校	職務	派閥関係
程式峻	広東中山	日本東京帝国大学土木科	建設総署公路局長	殷同
林是鎮	福建	日本東京高工学校建築科	建設総署都市局局長	殷同
蔣蔭喬	奉天錦州	日本帝大学校	華北塩業会社理事兼産業部部長	殷同
黄復生	広東	日本東京帝大法政科	建設署秘書長	殷同
汪時璟	浙江	日本士官学校	臨時政府行政委員会財務局長	
張君度	広東	日本某大学	準備銀行総務局長	汪時璟
漆士昌	貴州	日本某大学	準備銀行総務局副局長	汪時璟
陳錦文	江蘇崇明	日本某大学	準備銀行管理局局長	汪時璟
欧陽載祥	広東	日本某大学	準備銀行発行局局長	汪時璟
唐卜年	湖南瀏陽	日本某大学	天津準備分行經理	汪時璟
謝祖元	江蘇武進	日本某大学	青島準備銀行分行經理	汪時璟
殷澐	江蘇江陰	日本陸軍学堂	青島準備銀行副理	汪時璟
吳錫永	浙江呉興	日本陸士歩兵科第一期	財政総署署長	汪時璟
王允誠	浙江	日本法政専門学校	財政総署簡任秘書	汪時璟
黄伯雄	広東順徳	日本京都帝国大学経済科	財政総署薦任秘書	汪時璟
王蔭泰	浙江	日本の大学を卒業後、ドイツに留学	臨時政府議政委員会委員	王克敏
陳家鳳	江西	日本大学法律専科	実業部簡任秘書	王蔭泰
金少偉	江蘇	日本明治大学法律科	農鉱局局長	王蔭泰
鈕先錚	江西	日本明治大学	実業部勞工局局長	王蔭泰
李岐山	河北	日本帝国大学採鉱冶金科	実業総署外事秘書	王蔭泰
邵文凱	奉天	日本陸軍学堂	北京憲兵司令	齊燮元
劉潜	河北天津	日本弘文学院	齊燮元の秘書長	齊燮元
陳定遠	湖北	日本法政学堂	治安総署秘書	齊燮元
李烈華	福建人	日本京都帝国大学	治安総署で華北の日本軍との往来事務を担当	齊燮元
杜錫鈞	河北	日本陸軍士官学校	治安総署少将参事	齊燮元
王斌	山東福山	日本陸軍大学校	治安総署軍咨局上校科長	齊燮元
趙錫光	河北宛平	日本陸軍士官学校	治安総署軍咨局上校科長	齊燮元
白雲峰	河北大興	日本東京警察学校	治安総署警政局科長	齊燮元
黄南鵬	福建詔安	日本陸軍士官学校	治安総署治安軍第二集団少将司令	齊燮元
杜柳村	河北固城	日本明治大学政治経済科	治安総署治安軍第二集団中校軍需処長	齊燮元
毛昭江	福建龍溪	日本帝国大学法科	治安総署治安軍第二集団中校軍法処長	齊燮元
劉組笙	河北塩山	日本士官学校	治安総署治安軍第三集団少将司令	齊燮元

氏名	原籍	出身校	職務	派閥関係
邵怡春	浙江東陽	日本明治大学法律科	華北政務委員会参事	朱深
史兆德	山東楽凌	日本九州帝国大学	政務庁外務局第一科科长	朱深
高燮	浙江杭県	日本早稲田大学	政務庁法制局編訳科長	朱深
朱希齡	河北	日本明治大学研究科	刑事庭第一廷長	朱深
張燕卿	河北	日本貴族学院	新民会副会長	
呉栄	河北	日本早稲田大学	張燕卿私人秘書	張燕卿
朱毓真	浙江	日本高工電気科	華北電業会社工務部次長	張璧
陳静斎	河南	日本某大学	河南省長	張璧
張伯言	四川	日本高工学校	北京電東公司秘書長	張璧
湯爾和	浙江	日本医専大学	臨時政府議政委員長兼教育総長	
董康	江蘇	前清進士、後に日本留学	臨時政府議政委員会委員	朱深
余晋穌	浙江	日本憲兵学校	北京特別市公安局長等	
劉玉書	(四川)	日本士官学校	電電会社常務理事	湯爾和

以上、全部で69人となっているが、清末に日本で留学生監督を務めていた王克敏を入れれば、70人となり、全体の35%を占めることになる。このデータで、1937年に樹立された中華民国臨時政府の官吏のなかで日本留學生が約三分の一を占めたという事実が分かる。

さらにその原籍を多い順に上位5位までを見れば、浙江省12人、河北省10人、江蘇省6人、広東省6人、福建省6人となる。これは前に触れた原因の以外に、たとえば河北省が2位を占めるのは政府所在地に近いことも大いに関係していると思われる。浙江省がトップに立ったのは臨時政府に浙江出身の高官が多かったことにもよるとと思われる。行政委員会委員長長の王克敏、議政委員会委員長兼教育総長の湯爾和、行政委員会委員の王蔭泰など、その原籍はみな浙江省である。一部の浙江出身の留學生は彼らと同郷の関係で政府に入ったと見られる。たとえば、上記史料によると、日本高等工業学校を卒業した浙江籍の邵東湖は、湯爾和の紹介で王克敏の娘婿となり、王克敏の日本側との交際・応接等の任務をすべて担当したという。また、早稲田大学卒の浙江余杭籍の関庚沢は、王克敏と同郷であるため、王克敏のためにいろいろ奔走し、王に日本の情報などを数多く伝えたとされている。これらの大小さまざまな「漢奸」はいろいろな関係で結託し、私利私欲のために国家と人民の利益を裏切ったとされる。

そのほかに、この史料には多くの人物の性格に対してもかなり詳しい記録が残されている。たとえば、王蔭泰に対して、「帰国後、長年軍事と政治の部門に勤めた。人となりは忠実で、後に張作霖に重用され外交総長となった。学者の風があり、和平的かつ慎重で、職務に忠実で、事務官の美材である」と称える一方、朱深に対しては、「その人は性格が甚だ陰險かつ狡猾である。権勢に熱中するが表には恬淡を見せ、口で利を言わないが巧みに取るものは甚だ多い。ゆえに正直な人は彼と交際する人が甚だ少ない。その政治はただ表を飾る一時しのぎのもので、主義や政見などのものは絶無である」と酷評している。このような人物性格の描写は、著者の主観的な要素も一部入っているだろうが、人物の性格とその人間関係を研究するのに重要な参

考資料となる。

結びに代えて

以上、留学生の「反日」と「親日」について述べてきたが、ここで考え直せば、日本留学生のうち、「反日」であった人、「反日」とされていた人、「親日」であった人、「親日」とされていた人、そういう人たちの中に、祖国の中国と「第二の故郷」の日本を共に愛したかったが、時代に翻弄されてそういうわけにはいかなかったという人も多数いたのではないと思う。また戦後「漢奸」として起訴された人は3万人にものぼり、そのなかに日本留学経験者も多く含まれている。そういう人たちの不幸な運命を思う時、彼らを弁護するわけではないが、もし別の時代を生きていればどんな人生を送っていただろうとつい考えてしまう。二千余年の長きにわたる日中交流の歴史の中で、近現代の日中の不幸な時代は実に短い。短いから早く忘れようというのではなく、その歴史が両国の、どれ程多くの人々の尊厳を傷つけ、人命を奪い、財産を失わせたか、なぜそういう不幸が起きたのかなど、二度と同じ過ちを繰り返さないためにも、それを次の世代へと伝え続けていかなければならないと思う。それは不幸な時代の犠牲者に対するもっとも良い慰めでもある。

注

- 1) たとえば、李兆忠「陶晶孫の“東瀛女兒国”」(文学評論、2003年第6期)、張瑞安『留日士官生與清末民初軍事現代化成敗』(華中師範大学修士學位論文、2003年)、薛明『当代日本留學生的發展與啓示』(華東師範大学修士學位論文、2008年)など、ともにこの言い方について論及している。
- 2) 曹汝霖(1877-1966)、江蘇省上海県の出身、日本留学帰国後、袁世凱政権と段祺瑞政権で参議院議員、外交部次長、交通総長などを歴任。五四運動において、陸宗輿(幣製局総裁、前駐日公使)・章宗祥(駐日公使)とともに「売国奴」として糾弾され失脚した。
- 3) 曹汝霖『一生之回憶』、香港春秋雜誌社、1966年、第26頁。
- 4) 郁達夫(1896-1945)、浙江省富陽県の出身、1913年留学生として来日し、留学時代から文学作品の創作を始め、帰国後も小説創作を中心に活動を続けた。日中戦争の勃発後、救国運動に活躍。終戦直後にインドネシアで日本憲兵に殺害されたとされる。
- 5) 郁達夫『郁達夫文集』第四卷、花城出版社・香港三聯書店、1982年、第93頁。
- 6) 同上、第95頁。
- 7) 鐘叔河編『周作人文類編・日本管窺』、湖南文芸出版社、1998年、第23頁。なお、本稿で引用した周作人の文章の日本語訳は一部木下英雄編訳の『日本談義集』(東洋文庫、2002年)を参照した。
- 8) 李兆忠『看不透的日本—中国文化精英眼中的日本』、東方出版社、2006年、第107頁。
- 9) 前掲『郁達夫文集』第四卷、第29頁。
- 10) 同上、第156-157頁。
- 11) 同上、第156-161頁。
- 12) 周作人『知堂回想録』第二卷、群衆出版社、1999年、第157頁。
- 13) 木山英雄「乾栄子と羽太信子」、『季刊 鄺其山』、1989年、第22号。
- 14) 周作人『周作人自編文集・談虎集』、河北教育出版社、2002年、第322頁。

- 15) 前掲『周作人文類編・日本管窺』、第49頁。
- 16) 同上、第323頁。
- 17) 前掲『周作人文類編・日本管窺』、第619頁。
- 18) 民国時代の公務員の位の一つで、特任より一ランク下で、薦任・委任より上の位である。中央政府各部の次長、各省の庁長などの任用が可能である。
- 19) 復旦大学歴史系中国現代史研究室『汪精衛漢奸政權の興亡』、復旦大学出版社、1987年、第468-469頁。
- 20) 同上、第470頁。
- 21) 引用論文の「抗戦時期偽政權高級官員状況的統計與分析」のなかでは54人とされているが、殷汝耕と池宗墨の二人を計算に入れなかったようである。本稿では56人に改める。
- 22) 汪朝光「抗戦時期偽政權高級官員状況的統計與分析」、『抗日戦争研究』1999年第1期。
- 23) 南京市档案馆『審訊汪偽漢奸筆録』、江蘇古籍出版社、1992年、第1206-1207頁。
- 24) 同上、第998-1006頁。
- 25) 同上、第43頁。
- 26) 「反日」と「親日」の間を揺れた人物の一人である。20世紀の初めに二回日本留学し、青年時代に清朝政府要員の暗殺にも積極的に参加するなど革命活動に加わっていた。満州事変後には日本の中国東北支配に強い憤りを抱き、自らその実地調査にまで乗り出し、その調査結果に基づいて、日本の中国東北支配は必ず破綻すると結論づけている。また、一部親日である者がいるという現実を見ては、日本の中国侵略の事実を挙げて、日本には親しむべきところが全くないとまで述べている。しかし、1937年に北京が日本軍に占領されてからは、傀儡政府が直接管轄する北京市立高級工業職業学校の校長を務め、後に傀儡政府建設総署の総務局長に任命され、最後には漢奸と目され国民党政府の特務機関に暗殺されている。詳しくは拙稿「清末中国人日本留學生俞大純の出自とその生涯」（四天王寺大学紀要、第46号）を参照されたい。
- 27) 俞大純『東北実地調査記』、中華民国二十二年、第48-49頁。
- 28) 「清国留學生の教育引受の議に関し啓文往復の件」、外務省外交史料館所蔵『在本邦清国留學生關係雜纂』。
- 29) 「国聞短評」、『新民叢報』、1904年3月、第76頁。
- 30) 青柳篤恒「支那人教育と日米独間の国際的競争」、『外交時報』第122号、明治41年1月10日、「論説」欄。
- 31) 孫江東「敬上郷先生請令子弟出洋遊學並籌集公款派遣學生書」、『浙江潮』、光緒二十九年総第7期、第5-6頁。
- 32) 胡漢民「胡漢民自伝」、『近代史資料』第45号、1981年8月、第12-13頁。
- 33) 前掲『一生之回憶』、第31頁。
- 34) 前掲『周作人文類編・日本管窺』、第27頁。
- 35) そのほかに、張璧の友人20人の姓名、職業または職務が記載されている。
- 36) 学校名の記載に不統一な部分もあるが、本稿ではそのまま抄録する。